発行：一般社団法人　日本老年療法学会

一般社団法人
日本老年療法学会
The Japan Geriatric Therapy Society

News letter
日本老年療法学会
The Japan Geriatric Therapy Society

第5回 日本老年療法学会学術集会の開催にあたって

日頃より当学会の活動にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。早いもので、当学会も設立から5年が経過し、節目となる第5回学術集会を2026年11月28日（土）・29日（日）に名古屋市立大学で開催することとなりました。今回、テーマを「つながる～多職種で挑む老年療法学の最前線～」として、現在、実行委員のほうで企画を詰めているところです。人と人、人とモノといった物理的なつながりだけでなく、場所と場所との空間的なつながり、過去から未来への時間的なつながりなど、つながっていく世界の素晴らしさや大切さを振り返るきっかけになれば幸いです。

リハビリテーションの現場では、誰もがその人らしく人生を過ごしていけるように、治し支える医療から地域での豊かな暮らしの提案まで、多種多様な取り組みが行われていると思います。

学会当日はぜひとも会場に足をお運びいただき、様々な角度からディスカッションできることを願っております。今年9月には、名古屋でアジア・アジアパラ競技大会が開催されます。街も賑わっている時期ですので、会場から足を延ばして束の間観光に訪れていただくのもおススメです。多数のご参加をお待ちしております。

第5回 日本老年療法学会学術集会
大会長　髙山 優子
名古屋市立大学医学部附属
リハビリテーション病院

特別講演のご案内

特別講演

高齢期における高次脳機能障害支援のあり方
―機能向上より優先する支援とは？―

第5回日本老年療法学会学術集会の特別講演では、高次脳機能障害当事者であり、その理解と支援の普及活動を精力的に行っている鈴木大介氏をお招きし、「高齢期における高次脳機能障害支援のあり方」をテーマにご講演いただきます。

高次脳機能障害は、記憶、注意、遂行機能、社会的行動などに影響を及ぼし、日常生活や社会参加にさまざまな困難をもたらします。さらに高齢期においては、加齢に伴う身体機能の低下や併存疾患、社会的役割の変化などが重なり、その支援はより複雑かつ多面的なものとなります。

本講演では、身体機能や言語機能の回復に加え、代償手段の活用や環境調整、心理的支援を含めた包括的な支援の重要性について、当事者の視点からお話しいただきます。また、臨床現場で対応に苦慮することの多い易怒性や感情コントロールの問題にも触れ、本人・家族・支援者それぞれの立場から望ましい支援のあり方について考えます。

超高齢社会を迎えたわが国において、高次脳機能障害を有する高齢者への支援は今後ますます重要な課題となります。本講演が、医療・介護・福祉に携わる専門職の皆さまにとって、当事者理解を深め、よりよい支援の実践につなげる機会となれば幸いです。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

文筆業
鈴木 大介 氏

特別企画のご案内

名古屋市とのジョイントシンポジウム
「通いの場における行政と現場、それぞれの工夫と課題」について

特別企画

「通いの場」に関する課題は、行政と現場でどのように見え方が違うのか？

名古屋市立大学医学部 保健医療学科
リハビリテーション学専攻（第5回学術集会 実行委員長）
池田 崇

旧来の障害像を基盤としたICIDH（国際障害分類）から、2001年に生活機能モデルであるICF（国際生活機能分類）がWHOで採択されてから25年になります。その25年の間に日本は高齢化社会から高齢社会、さらには超高齢社会へと移ろっていこうとしています。そうした背景もあり、リハビリテーションの分野でも、従来は「慢性期」と呼ばれていた時期が「生活期」に改められ、障害でなく、生活をみていくという視点は療法士や関係職種にとって共通の価値観となってきました。

日本における介護保険の歩みは、ほとんどそのままICFと重なりますが、当初の措置から契約への制度移行から、現在はいかに介護予防を推し進めるか、要支援の手前側の充実が図られています。「通いの場」は全国の各自治体が介護予防だけでなく、地域の活性化と自助・共助の促進のために知恵を絞って、その運営に取り組んでいますが、それぞれに課題があるようです。

第5回学術集会では、「通いの場」にかかわる行政と現場の専門家をお招きして、名古屋市ジョイントシンポジウム「通いの場における行政と現場、それぞれの工夫と課題」を開催いたします。行政の取り組みとして、厚生労働省と国立長寿医療研究センターが共同で全国展開している「オンライン通いの場アプリ」や名古屋市が独自に運用している「フレポ＆見守り」アプリを紹介し、デジタルデバイスを活用した「通いの場」や介護予防の狙いをお話しいただきます。一方で、実際の「通いの場」の現場において、その運用やデジタルデバイスの活用について、研究者の目線で見た課題をお話しいただくとともに、現場で運営・管理にあたっているシンポジストからは、現場の課題やデジタルデバイスを活用する側の率直な意見をいただけることを期待しています。

介護予防を推し進めたいという思いは、行政も現場も共通していますが、その見え方は行政と現場でどのように違うのでしょうか。また、その見え方を双方のみならず参加者の皆様とも共有できたときにどんなケミストリーが生じてくるのか、ぜひ会場に足をお運びください。

実行委員からの一言メッセージ

実行委員長

池田 崇

名古屋市立大学医学部 保健医療学科
リハビリテーション学専攻

第5回学術集会では、地下鉄からアクセスのよい会場をご用意するとともに、懇親会も新築ピカピカの会場で行います。学会後はぜひ名古屋めしに舌鼓を打っていただき、名古屋でのひと時が充実したものになることを願っております。

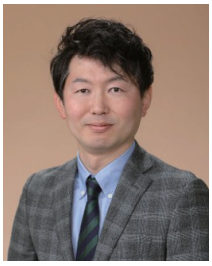
副大会長

宮田 恵里

関西医科大学
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

第5回学術集会は「つながる～多職種で挑む老年療法学の最前線～」をテーマに、名古屋にて開催されます。本学会初となる言語聴覚士の大会長のもと、多職種の連携を軸に興味深い企画や多彩なプログラムを準備しております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

広報委員



永見 慎輔

北海道医療大学
リハビリテーション科学部

広報委員として、本学術集会の魅力や老年療法学の実践知がより多くの方に届くよう発信に努めます。多職種で学び合い、臨床・研究・教育をつなぐ場となることを楽しみにしております。

小谷 優平

川崎医療福祉大学
リハビリテーション学部

失語症や高次脳機能障害をはじめ、加齢に伴うコミュニケーション障害は、ご本人とご家族の日々の暮らしに深く関わる重要な課題です。日本老年療法学会は、職種や領域を越えて知が交わる貴重な場であり、臨床と研究、そして地域をつなぐ学びを、皆さまとともに広げてまいりたいと願っております。ぜひご参加ください。

栄元 一記

兵庫医科大学病院
リハビリテーション技術部

老年療法学会は、よりよい高齢者保健・医療・福祉の実現を目指し、多職種が臨床や研究の知見を共有し、議論を深める場です。第5回学術集会では、初めて言語聴覚士の先生が大会長を務められます。専門職の皆さまはもちろん、これから高齢者支援を担う学生の皆さまも歓迎しております。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

企画・プログラム委員

鈴木 瑞恵

北海道医療大学
リハビリテーション科学部 言語聴覚療法学科

第5回学術集会は「つながる」がテーマです。このテーマを基に、特別講演、シンポジウム、教育講演、一般演題と多くのプログラムを企画しています。職種がつながる、地域・病院・施設がつながる、臨床・研究・教育がつながることで、さまざまな点と点がつながる学術集会になれば幸いです。みなさまのご参加をお待ちしています！

松沢 良太

兵庫医科大学

第5回老年療法学会学術集会の実行委員を務めております。今年もさまざまな立場の方々が集い、活発な議論が生まれることをとても楽しみにしています。高齢者医療の未来を一緒に考える場として、ぜひ多くの皆さまにご参加いただければ幸いです。当日お会いできることを心よりお待ちしております！

田中 創

名古屋市立大学 医学部附属
リハビリテーション病院

名古屋市立大学医学部附属リハビリテーション病院にて作業療法士として勤務し、脳損傷者の運転再開支援や高齢者の移動支援に取り組んでいます。道路交通法改正により、自転車を含めた高齢者の安全な移動支援の重要性が高まっています。こうした背景から、「地域生活する高齢者とモビリティ」をテーマとした教育講演を企画しています。名古屋で皆様とお会いできることを楽しみにしております。

濱島 一樹

医療法人 喜光会
北里クリニック

この度、企画・プログラム委員として、主に日本糖尿病理学療法学会とのコラボシンポジウムの内容調整を担当させて頂きました。多くの世代の方々に関連する「糖尿病」をキーワードに、より良い生活を送り、より良く年齢を重ねられるような疾患との向き合い方を提示できればと思っています。

川邊 圭太

社会福祉法人 農協共済
中伊豆リハビリテーションセンター

高齢期の支援では、疾患や障害だけでなく、その人が何を大切にし、どのような人生を歩みたいのかを理解することが重要です。本学術集会では「つながる」をテーマに、多職種と当事者の視点を結びながら、より良い支援のあり方を探求します。多くの皆さまと学びを共有できることを願っております。11月の名古屋で皆さまにお会いできるのを楽しみにしております。

演題・抄録委員

外山 稔

東京工科大学
医療保健学部

第5回学術集会では、言語聴覚士が初めて実行委員長・副大会長を務めます。老年療法学は、高齢者の健康増進と機能回復を支える学際的領域であり、言語聴覚士の専門性とも密接に関わっています。本大会が、多職種連携の意義や広がりを実感する機会となることを願い、鋭意準備を進めております。多くの言語聴覚士の皆さまにもご参加いただければ幸いです。

大森 史隆

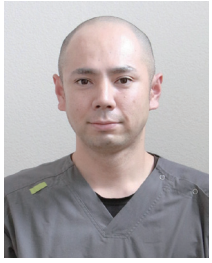
福岡国際医療福祉大学
医療学部 言語聴覚学科

多職種がそれぞれの専門性を持ち寄り、職種や地域を越えて学び合える場となること、新たな交流や気づきにつながる有意義な機会となれば幸いです。日々の臨床・研究・教育に生かされる活発な議論を通して、老年療法学のさらなる発展につながることを楽しみにしております。

田中 睦英

県立広島大学
保健福祉学部 保健福祉学科 作業療法学コース

このたび演題・抄録委員を拝命いたしました。学術集会という大切な場でこの役を担えることを大変光栄に思っております。学術集会は皆様の演題こそが主役であり、その一つ一つが学会を鮮やかに彩ります。研究も実践報告も、まだ形になりきらないアイデアでも結構ですので、皆様ぜひ奮ってご応募ください。



今岡 信介

大分岡病院
リハビリテーション部

演題・抄録委員として、本大会テーマである「つながる」を軸に、多職種・地域・テクノロジーが交差する老年療法学の実践と研究が広く共有される場となるよう、微力ながら準備に携わらせていただきます。皆様のご発表が、新たな交流と学び、そして今後の老年療法学の発展につながるよう、尽力してまいります。

研究室紹介：永見研究室

私たちの研究室では、「話す」「食べる」「社会とつながる」ことを支える言語聴覚療法を、計測技術、医療機器開発、音響・音声解析、人工知能、臨床実装の視点から発展させることを目指しています。臨床で感じる小さな疑問や困りごとを出発点に、現場で使いやすく、対象児者の評価や支援に役立つ方法を形にしていくことを大切にしています。

これまで継続して取り組んできたテーマの一つが、摂食嚥下リハビリテーションに関する研究です。10年ほど前から、嚥下音や呼吸音などの音響情報、各種センサ技術、機械学習・人工知能の考え方を少しずつ取り入れながら、嚥下機能を非侵襲的かつ客観的に捉える方法を検討してきました。近年は、音響・音声を用いた評価・支援にも関心を広げ、発声や発話から得られる情報をもとに、声や構音の状態をより客観的に評価する方法を探っています。また、構音障害に対する評価・支援も新たな研究テーマとして取り組み始めており、臨床での評価や支援をよりわかりやすく、継続しやすいものにすることを目指しています。

理学療法・作業療法領域の先生方とも連携し、姿勢、活動、食事場面と嚥下の関係に着目した研究も進めています。さらに、音響・音声データ、センサデータ、人工知能を、言語聴覚士の臨床業務にどのように組み込めるかにも関心をもっています。評価、記録、説明、訓練計画、経過確認といった日々の業務を支え、臨床の質と効率の両方を高めるための実装研究にも取り組んでいます。

共同研究では、失語症・高次脳機能障害に関連する研究にも関わっています。言語、認知、嚥下、活動、生活を切り分けて考えるのではなく、臨床で生じる複合的な課題を、多職種・多領域の視点から捉えることを大切にしています。

現在は、博士課程・修士課程の大学院生、大学教員として活躍している修了生、病院で臨床に携わりながら研究を続けている方々とつながりながら、少しずつ研究を進めています。まだ小さな研究室ですが、所属や職種、立場の垣根を越えて、気軽に相談し合いながら、ワイワイと研究を進められる場にしていきたいと考えています。

北海道医療大学 リハビリテーション科学部
言語聴覚療法学科
永見 慎輔

永見研究室のメンバーと共同研究者の先生方

オンラインミーティングの様子

日本老年療法学会
The Japan Geriatric Therapy Society

日本老年療法学会ニュースレター　［2026年6月］

【編集・発行人】　日本老年療法学会広報委員会
土井・井上・石橋・小川・田宮・永見・三栖・丸田・宮田・一杉・甘粕・川端・大竹・大坪
大館・福田・前田・栄元・小谷・田中

【発行所】　一般社団法人日本老年療法学会
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1パレスサイドビル　毎日学術フォーラム内

【事務局】　一般社団法人日本老年療法学会
TEL：03-6267-4550　FAX：03-6267-4555　E-mail：maf-jgts@mynavi.jp